聴覚障がい者のコミュニケーションの特徴

<手話>

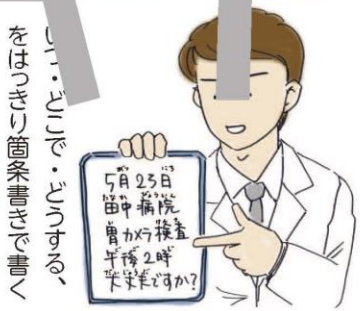
手話は音声言語のように独立した形での助詞はない等、言語体系が異なります。
また、地方によって表現が異なります。
そのため、読解が苦手な人も一部います。

<読話>

口の動きや会話の前後関係から会話の内容を把握する方法です。
口の動きが似ている言葉や、濁音・半濁音の判別が困難です。
例）たばこ／たまご　判別／強烈

<筆談>

長い文章・尊敬語・丁寧語は避けてください。
箇条書きにすると理解されやすいです。
質問は「はい」「いいえ」で答えられるようにすると良いです



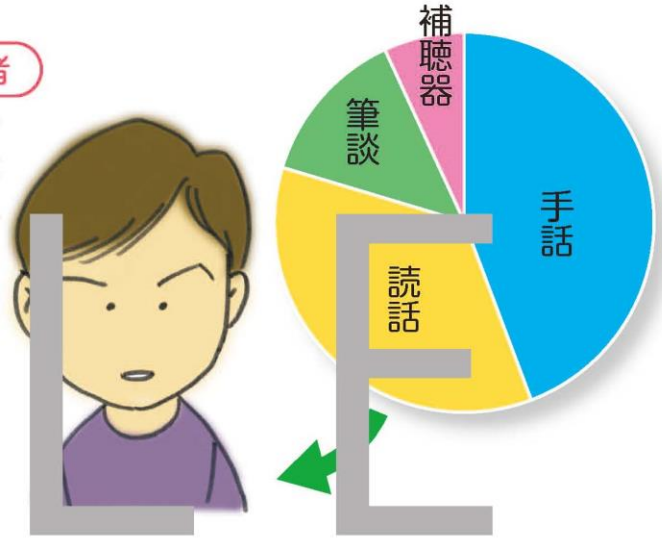
<アプリ等>

スマートフォンやタブレットで筆談や音声認識機能のあるアプリを使用して、コミュニケーションする方法もあります。

聴覚障がい者のコミュニケーション方法は、聞こえの種類とその人の環境により、個人により異なります。
先天性の聴覚障がい者でも、その人の環境により、手話ができない人もいます。
一例を示すと、下記のイメージです。

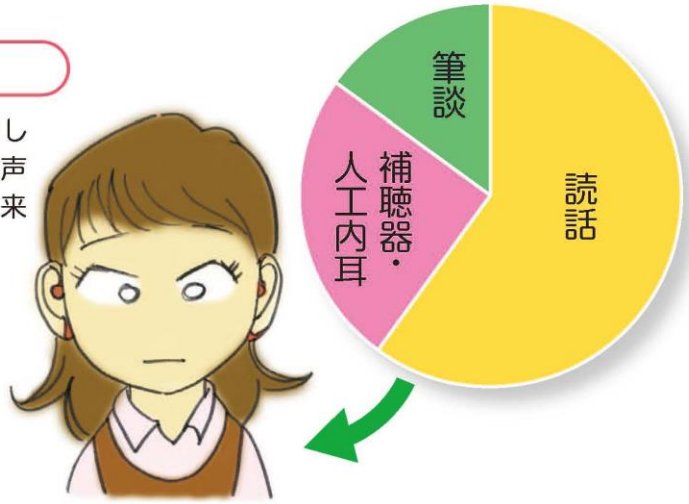
生まれつきろう者

音声言語獲得期前に失聴し、手話を第一言語としている人が多



難聴者

補聴器等を利用して、ある程度の音声言語の識別が出来る人が多い。



SAMPLE

家族や手話通訳者が同伴していても、聴覚障がい者本人を見て説明を受けたい人もいます。
具体的な症状や治療方針などを本人に聞かずに話を進めると、コミュニケーションのずれが起こり、本人が不安を感じたりしてしまいます。

医師や看護師が、患者本人ではなく聞こえる家族に向けて話をしてしまう

障害者差別解消法

内閣府 HP の「**障害者差別解消法 医療関係事業者向けガイドライン ～医療分野における事業者が講ずべき障害を理由とする差別を解消するための措置に関する対応指針～　平成 28 年 1 月 厚生労働大臣決定**」では、下記のように明記されています。

◎サービスの提供に当たって、他の者とは異なる取扱いをすること
◎本人を無視して、支援者・介助者や付添者のみに話しかけること

検査で困っていることは

胃バリウム検査・X線撮影など、別室での技師のマイクの指示は聞こえません。
また、カーテン越しに呼ばれても分からないので、直接呼びに行く必要があります。
婦人科や泌尿器科での内診は、カーテン越しに話しかけられるため、何を話しているか分からず不安に感じます。
患者さんの側でフォローする、カーテンを少し開けて顔が見えるようにするなどの配慮が必要です。

マイクでの検査の指示がわからない

カーテン越しに話しかけられてもわからないので不安…

SAMPLE

家族や手話通訳者など同伴者がいても、聴覚障がい者本人を見て説明して欲しいと思っています。
家族、手話通訳者がいても、本人に向かって説明してください。

SAMPLE

検査での対応

検査方法を事前に詳しく説明すると、検査の流れがわかり、安心します。
別室にいる技師のマイクの指示は聞こえないので、指示を文字で示すと分かりやすいです。